目次

下巻「批判主義的学問観の形成」序……3

第一部　中国の学問観……13

一　中国の学問観……15

二　疑古の歴史……35

1　信古・疑古・釈古……35
2　書なきに如かず――孟子――……38
3　神農・黄帝に託して入説す――『淮南子』――……41
4　事に思うなし――王充――……44
5　これを歴代に求む――劉知幾――……48
6　事實を求むるに理例を推すべし――陸淳――……52
7　讀む者愼みてこれを取れ――柳宗元――……55
8　偽説の經を亂るを知らず――歐陽脩――……58
9　宋学について……61
10　義理の當否、左驗の異同――朱子――……63
11　考索必ず至實に歸す――葉適――……68

12 書を以て傳わり書を以て晦し——王柏……71
13 顧うに擇ぶ所の如何のみ——高似孫・王應麟・馬端臨——……75
14 是非の心は味ますべからず——吳澄——……80
15 古書は多くは後人の手に出づ——宋濂——……85
16 伏生の本經を以て僞書の墨守を發く——梅鷟——……88
17 僞書を毀うるの道——胡應麟——……91
18 史傳に據りて經を正す——閻若璩——……96
19 これを離せば雙美——胡渭——……100
20 讀書の第一義——姚際恆——……105
21 盡くは僞託に出ずるには非ず——章學誠——……109
22 知らざる所無き者、眞知に非ず——崔述——……115
23 託古改制——康有爲——……120
24 層累造成の古史——顧頡剛と『古史辨』——……124
25 疑古と釈古——結び——……130
三 古代思想の哲学的総括……133
1 『莊子』天下篇の意味……133
2 『漢書』藝文志の意味……156
四 戴震の哲学と古代思想……168
第二部 日本近世の漢学……193

一 藤原惺窩の儒学思想……195
二 徂徠学の特質……218
三 日本考証学派の成立——大田錦城を中心として——……238
四 会津藤樹学の性格……291
五 日本近世における『中庸』解釈について……310
六 日本における中国文化の受容のしかた……322
第三部 漢学から支那学、中国学——研究の反省——……343
一 中国思想史総説……345
二 特殊思想通史の回顧……367
三 道家思想研究の概況……397
四 先師懐想……406
1 内藤湖南と武内誼卿……406
2 湖南先生の『研幾小録』……411
3 武内義雄——東洋学の系譜——……413
4 誼卿武内義雄先生の学問……419
5 武内義雄『支那學研究法』『中国思想史ノート』解説……431
6 青木先生と私……441

7　吉川先生の哲学好み……444
8　吉川幸次郎先生と私……447
9　貝塚先生と新釈古……449
10　赤塚さんの諸子学……454

五　中国哲学のゆくえ……458
1　中国思想と現代……458
2　中国哲学のゆくえ……465
3　中国哲学に時間論のないこと……470
4　中国の孔子批判に思う……472
5　東洋思想の可能性――中国の思想対決の示すもの――……476
6　曲阜孔子誕辰記念行事に参加して……481
7　儒学はいま中国で――儒学国際会議に参加して――……486
8　儒学国際学術討論会の報告……490
9　孔子研究について――孔子誕辰紀念随感――……499

第四部　書評・雑纂……505

一　書評……507
1　バートン・ワトソン著『古代の中国文学』……507
2　重沢俊郎著『中国哲学史研究』……514
3　福永光司著『荘子――古代中国の実存主義――』……518

二　雑纂……523
1　前四史標点本の出版――とくに『後漢書』について――……523
2　米沢訪書記……529
3　古文尚書解題……533
4　アメリカの東アジア図書館……557
5　古典の翻訳について……567
6　石津照璽先生の思い出……574
7　『論語』と門人の年齢……576
8　『論語』から何を学ぶか――国語教育の上から――……579
9　『論語』と私……585
10　私の研究生活……588
11　伊賀の里から……590

補　中巻第一部十一付4　アスタナ出土の論語鄭注について……595

著作目録……609

あとがき……619